

全部歴史の如く順序し能はざるは、造句の都合に依る。或は對句の爲め、或は韻字の爲め。故に多少前後する者あれども致方なし。併し予の私案の理由を陳述せば、「俊入密勿。多士是寧」の前に、「匡公匡合。濟弱扶傾」を置くべきではない。「多士是寧」は、伊尹（阿衡）太公望、且、武丁、傅説、綺里季などは、何れも適當である。春秋五霸の一人たる桓公を入るるは、不適當。故に順序を変更して、次の「晉楚更霸」の前句としたのである。又「假途滅虢。踐土會盟」は、共に春秋間の出來事であるから、「晉楚更霸。趙魏困橫」と前後したのである。他は皆周興嗣整理の通りである。「起剪頗牧」も實は漢代以前の人物であるけれども、次句の「宣威沙漠」に關して前置の方が都合宜しと思はるるから、變更しないのである。

元來鍾繇の原作は、紛然として千字錯雜。其れを周興嗣が、頭髮の一夜に白くなるまで精魂を竭して整理し、韻を次序したのであるから、此の周興嗣の次韻せる者が、鍾繇の原作通りに爲りをるや否やは、無論疑問の存する所である。故に予は予の考察を

以て、右の如く順序を変更して見たのである。果して孰れが勝れるか。江湖識者の推斷を待たう。

抑も鍾繇の原作千字文が、何故散佚したかと論ずるならば、我が國の如き金甌無缺、世界最上の帝國であり乍ら、王仁が献上したと云ふ所の千字文が、今日存在せざるに非ずや。今日存在せる千字文は、王仁來朝以後約二百十八年も後たる、梁の周興嗣の次韻せる者に非ずや。まして彼の國の如き革命の政體では、帝王の代はる毎に、都は殆ど總て兵燹に罹り、幾多大切な書籍や寶物などの焼失せる者は、其の數莫大に上る事は、固より論ずるまでもあるまい。故に晉の王羲之の許に、千字の離れ、ばなれありし者を、梁の武帝が周興嗣に命じて、整理次韻せしめたる事は、緒言中に詳細記述した通りである。由つて以て是等の事情を總て了承せられたし。

抑も是の如く句の位置變換を試みた者は、梁の武帝天監以來一千四百四十年の今日に至るまで、支那日本を通じても殆どあるまい。其れとも寡聞の筆者なりや。果して如

何。聊か以て跋と爲す。

附 說

尙ほ一言之に加へたきは、筆者最近秋陽を幸ひ曝書せし處、豈に圖らんや凡そ百年も昔より我が家に傳來せりし「古本千字文」の一書あるを發見せり。喜び勇みて披見しければ、此の千字文を次韻せし周興嗣と同時代なる、「梁の大夫内司馬李暹」と云ふ者の註したる千字文であつた。因つて左に參考と爲るべき者を記載して、本編の補足と爲さんと思ふ。原漢文なれば、習讀に便せん爲に、國譯と爲したり。

註、千字文の序。梁大夫、内司馬、李暹。

鍾繇が千字文の書は、雲鶴の天に遊飛し、群鴻の海に戯るるが如し。人間茂密にして實に遇ひ難し。王羲之の書は、字勢雄にして、龍の淵門に躍り、虎の風閣に臥すが如し。故に歴代之を寶として、傳へて以て訓と爲し、諸を秘府に藏む。永嘉の年に逮ん

で據を失す。

丹陽に遷り移つて、紫川途阻たり、江山遐に險し。兼ねて石勒が爲に逼り逐はれて駈せ馳す。又暑雨に逢うて、載する所の典籍、茲れに従つて靡爛す。千字文幾ど將に湮没せんとす。晉の末、東晉の元皇帝其の絶滅せんことを恐れ、勅して遂に右將軍王羲之をして其の文を繕寫せしめ、用つて教授を爲す。但し文勢次です。音韻屬せず。其の獎め導くに及んで、頗る以て難しと爲す。梁の武帝命を受くるに至つて、員外散騎侍郎、周興嗣をして其の理を推して、之が爲に韻を次がしむ。夫れ學は蓋し身を立つるの本、文は乃ち官に入るの始めなり。是を以て天を開き地を立て、三曜是に於いて生じ、二儀既に立ち、四節之を以て序でに由る。(以下省略)。

右の中「永嘉の年に逮んで據を失す」とは、魏について起つた晉の世が、第三代懷帝の永嘉三年に、後趙の石勒が入寇し、五年六月、遂に晉の都城洛陽を陥れて、帝を他に遷し、斯くて五年の後、西晉は、四主五十二年にして亡んだのである。是の亂の爲

に據を失し、石勒が爲に逼り逐はれて、駈せ馳すと云つたのである。

「晋の末、東晋の元皇帝」とは、

右の如く西晋が滅んで、懷帝と祖先を同じうする元帝が、北部支那の黄河の河城より遙か南部支那楊子江の沿岸地なる、今の南京に落ち延びて帝位に即き、東晋と稱した其の第一代の皇帝である。

此の時代を六朝と稱す。即ち隋が天下を統一するに至るまで、建業即ち今の南京に都せし、吳、東晋、宋、齊、梁、陳の六個時代を謂ふ。

東晋、十一主、百三年。(西晋、四主、五十二年)

宋、八主、六十年。

齊、七主、二十四年。

梁、四主、武帝は此の方の第一世である。

斯くて陳、隋の二代を経て唐に至る。而して唐以前の六代を總じて六朝とも稱す。

次に千字文最後の、「謂語助者。焉哉乎也」の處に、左の如く註せり。

焉哉乎也の四字、語助と曰ふと雖ども、然れども焉は反説なり。哉は歎なり。乎は嗟なり。也は辭を絶するなり。昔、梁の武帝、侍中周興嗣をして韻を次がしむ。兩句を少く。故に語助を以て之を足すなり。晋の武帝、魏の後を承けて、始めて路州城に在ます。大夫鍾繇、此の文を造り得て、天子に上つる。帝愛して其の手を離さず。晋、宋の文帝に逐はれ、移つて丹陽に向つて難を避く。其の千字文車中に在り。路にて雨に逢ふ。車漏れて千字文を濕す。行いて丹陽に至り、書篋の中に藏す。晋天下を治むるに十五帝を得、共に一百五十年。宋の文皇帝劉裕位を承けて天下を治むるに及び、晋帝の書庫中を開いて此の千字文を見るに、雨に亂れて其の次第を損失す。右將軍王羲之をして韻を次がしむるに得ず。宋帝天下を治むること凡そ六十年。齊位を承けて丹陽を治む。亦人の次ぎ得る無し。

齊七帝、治むること三十年。梁の武帝位を承けて、乃ち周興嗣に命じて韻を次がしめ

千字文を得たりと。

以上の文献に依つて見ても、次韻とは、他人の詩の韻を次ぐ意には非ずして、散亂せし文字を整理して、二句目の韻字を其れ其れの位置に順序能く次第せしめたとの意である事が知らる。然るに書道家の中に、鍾繇の千字文として、頗る難解の者を揮毫しあるを見た事あれども、前述の文献などに依つて見れば、其れは王羲之の集めた不整の者である。筆者其れを一讀せしも、韻は少しも合つてゐない。而してやはり最語には「謂語助者、焉哉乎也」とあつた。之は後人の追加である事は、固より論ずるまでもない。前述李邕が言つた通りである。詳細は尙ほ附記として後に追加せり。

追記

前述六朝宋の文皇帝劉裕が、「右將軍王羲之をして韻を次でしむるに得ず」とあつた、其の「次韻千字文」が、「初拓三希堂法帖」にも、又「御刻三希堂法帖釋文」にも、一は楷書、一は行草にして出てるから、参考の爲茲に追記しようと思ふ。梁の大夫内司馬李邕が曰へる如く、

「文勢不次。音韻不屬。及其獎導、頗以爲難」とあるが、全く其の通りである。故に是等を以て鍾繇の千字文と爲さば、頑石を誤認して寶石と稱するに均しかるべし。烏許の限りである。

魏太尉鐘繇千字文。右軍將軍王羲之。奉勅書。

二儀日月。雲露嚴霜。夫貞婦絜。君聖臣良。尊卑口別。禮義矜莊。

鍾文作感、法帖

千字文詳解 追加

作感。
釋文作笑、法帖
作誤。

釋文作元、法帖
作支。
二書共作吳。吳之
誤。

清宜作清。

存而相欣。離感悲傷。岫號藝機。解口求豈。毀浪飯。研笑徘徊。員
潔落葉。稷稅稼穡困。唐虞禪讓。率賓歸德。飛龍在田。圖書見
己。邇多世杜橐席。俶理誰逼。委翳渠荷。射牒施脩薪。孔立升堂。
墳典之盛。李村梧桐。新執表正。學優卿建。紙墨左令。詳願藉甚。
母嫡後稽。仁連比堅。顛神犢特。陸以受伯叔。布菑丸疲。移爵取。
宇宙元黃。歲盈餘吳。列宿調陽。崑崗珠劍。垂蒙瞻眺。務昆聆貽。
工指抗故。厥貢嶽云。百難治刻。畫綵丹青。漢宮稱職。盡忠景
行。名傳秉直。詩讚白駒。群賢轉植。魏假密踐。途惟靡特拱平章。
男女形端。谷聲虛積。容止溫清。言辭宜政。慎增情性。恬穰帷
房。悅豫接酒。矯杯侍巾續。御再拜烝嘗。旋璣暉朗。魄曜懼驟。
的歷陳根幹。凌囊具象。願熱獲捕。莽抽早異。享辱牆續。條守眞
驚。寫榜啓隱。華千輦鉅。勿又牧用。紫翫殆枇杷。駭躍超驥。且額

桓有二字不宜。

或、或溪之誤。

二書作磐。通盤。

二書共作耽。耽之
俗字。

執夕周發。巖使維賴。彼罔慕桓。振將家更。土鏡韓煩。寓目晝眠。
老少散慮。呂髮和同。殿丙公戚。市寐綸巧佳俗利。兩疏叛亭。杳冥
吉劬。隸漆浴驅轂內岱敢。達疑皆毛簡答於俠。陪骸垢冠高。茲阮
天嘯賤愚。秋地冬馳。麗桓惠衣裳。水鳥本弊。頗勒碑。實磻磻。
夜封戶壁。藍筭矩步。孤陋嘉猷。持物心動。甲帳對楹。樓觀磐
鬱。吹笙鼓瑟。伊尹阿衡。雁門縣逸。史魚孟軻。省躬銀素。垣
箱譏誠。廻傾丁晉。屬耳楚幸。即猶嗣驢。悚石碣。沙漠宣威。我
尋求古。寥沈默道遙讀。易口餬。論車策頓。盜宰手賊釋。耽招絳
焯。寵南寧納。駕肥惻陞。似息履薄。改環催。造次箴規。甘棠
去唱。上奉諸姑。始匪虧。外隨都邑。寸陰終時。過所定來。
畫得羔羊。淡師鱗潛。鴻大位樹。習寶與當。禍空念絲。覆染尅
日。作事是聽。福緣因登。入磨分投。廉退靡自。肆懷纓銘。

法帖作集。

映同映。

法帖作失。

法帖帖作帖。

翠遵州約。晚祗彫。果珍難量。夙若竟右。既集。如初亦聚。弔
 民興兵。洛極化無不及。充四塞。宗廟效靈。遐荒竭力。明
 王異舉。八方仰則。誅斬非道。勸賞黜陟。有功必美。亡善可逐。
 藏足爲奈。結乃愛首。被場榮罪。代萬醜騰。京背璧芒。推面口夏
 陶。西問筵黎。伏據戎仙羌階蓋府。身縣侈虎。軍國精志。引要文武
 斯妙。五經星辰下。照渭殊流。河川交映。富貴猶欲。短長從命。
 賤惡竝輕。好謙敬能。知任運官。祿靜競。遊鷗居謝。攸畏
 腸適。厭燭祭煌。祀牀弦康紛姿淑每嘖義矢祐。綏置廊恬。等聞鈞
 誥。芥出制體歡。鞠養基攝。益兒奄弗切。滿槐雨浮。鍾舍羅思。
 遣親張紈。涼晦領俯。束帶模扶節翦。微且臨何。濟合曲宅阜。
 澄深忘慶。設廣弁。趙霸近恥。其勉累奏。志跡鑑貌。辯并口信。
 起收給資糧。恐年蠲扇琴讎觴。蘭草巨木。筆懸闕。著往寒重。永

法帖實作寔。

法帖都作郡。

載成閭。人安業承。匡園池城。想獨釣茂松。逸意曠氣。東翠野
 畝。勞包農。食黍馨。火實生飢。膳霄摩王。英飽才器。談誠
 謹弱。譽榮紡綺。妾處士惶。最敦歌詠。帝俊仕會。朝審察法
 刑。鳳翔律樂。感禽獸。兄友弟。父慈子孝。篤訓雅操。庶幾
 庸。禹通九都。沛滅秦羽。傳說佐殷。洞庭遼遠。謂語助者。
 焉哉乎也。

漢語と云ふ者は、殆ど二字を以て熟字と爲した者である。故に二字
 づつにして拾ひ讀めば、讀めない事はないけれども、其れでは個立
 的で、上下と連絡しない。又四字を一句として讀む時は、讀み得ざ
 る所の方が多數である。之を要するに王義之も、勅命とあるから、
 實は已むを得ず、斯く集めた者と見ゆる。併し乍ら散亂錯雜、支離
 滅裂。只だ千字を集めたと云ふべきのみで、一編の文を成してゐな

い。然れども其れは兎も角、王羲之が斯く揮毫して存在してゐた爲に、後年周興嗣が整理して、今日の千字文の如く、一韻を合せ、又意義も全部通ずるやうに、次第順序し得た事を思ふと、王羲之の此の書あるを多とせざるを得ない。又其れと同時に、周興嗣が如何に苦心せられたるかが、判然と了知せられて、大に感謝せざるを得ない。前既に述べたる如く、周氏が之を次韻する爲に、「一夜にして白髪と爲つた」と云ふのは、固より苦心の形容なれども、大に首肯せられよう。王羲之の集合せる者に比較すると、其の優勝なること豈に只だ月鼈の差のみならんやである。

今一つ此に考ふべきは、前述梁の大夫李暹が註せる中に、「謂語助者。焉哉乎也」の處に、

「昔梁の武帝、侍中周興嗣をして韻を次がしむ。兩句を少ぐ。故

に語助を以て之を足すなり」

とある。之は如何。其處で三希堂法帖を熟覽するに、果せる哉、其の痕跡が歴然たり。「謂語助者焉哉乎也」の八字は、其れ以前の九百九十二字と、其の文字の大小が全然異なれり。故に之を拓本として買賣する者が、増加したる者なる事が明知せらるゝ。又其の拓本について、色々と檢閲せし者の印章があれども、其れ等は只だ寄せ集め者で、何等確實を證明するに足る者ではない。商業家の策謀であるのみ。因に「昔梁武帝」とある、此の昔は、疇昔と云ふに同じ。即ち先頃との意。猶ほ過去に、大過去と小過去とがあるような者である。百年も昔。十年も昔。今一つ考ると、王羲之の千字文中、一句も周興嗣の千字文と同一なる者なし。然るに最後の二句八字に至つて前回との連絡もなくして、突然成句の八字を追加したのは、餘り

にも其の矛盾さが克明に知らるゝ。殊に「洞庭遼遠」の下に一點を加へられたる如きは、是れより以後の八字は、後人の追加であると指示する者の如くである。尚ほ四角形を以て表示してあるのは、法帖の方の文字が缺けて、判然せざる爲に、只だうめ合せにしたのみである。

今一つ序でを以て、法帖と釋文との文字の異同について記述して見れば、大略次の通りである。何れ法帖の「行書」の方が根本であらう。然るに之を楷書にした釋文の方に、多少の差異あるは何故であらうか。古人と雖も、悉くは信を置けない。

釋文感、法帖作感(感宜)

釋文元、法帖作玄(玄宜)

釋文笑、法帖作咲(笑之俗字)

二書共作昃、昃之誤。溫清、宜作溫清。

桓有二字、一字蓋誤。

二書亦共作磻、溪之誤。

二書亦作磬、但磬通盤。

二書共作耽、耽之俗字。

釋文果、法帖作菓(果宜)

二書共作映、同映。

釋文作矢、法帖作失(矢宜)

釋文祐、法帖作祐(祐宜)

釋文作實、法帖作寔(字異意同)

釋文作都、法帖作郡(郡宜)

又釋文都有二字、其の何れかが誤り。

右の如き事情であるから、鍾繇の千字文として「王羲之の法帖千字文」を學んで之を書する如きは、全く没意味たる事を知らざるべからず。只だ「文字の書き方」を學習すべき材料たるに過ぎざるのみ。

今一つ注意すべきは左の題名である。

(一) 勅^{シテ}梁^ニ員外散騎侍郎周興嗣^ニ次^ツ韻^ヲ

之は梁の武帝が命令である。

(二) 梁^ニ員外散騎侍郎周興嗣^ニ次^ツ韻^ヲ

之は周興嗣が自ら韻を次序したとの意である。

追記(畢)

千字文詳解

出文協承認 180064



昭和十八年一月五日印
昭和十八年一月十日發

刷 行(三、〇〇〇部)

定價金壹圓八拾錢

(内税送料一五錢)

著者 松崎覺本

發行者 東京市麹町區有樂町一ノ二 松下長平

印刷者 東京市芝區新堀河岸三十一號 山村龜藏

印刷所 東京市芝區新堀河岸三十一號 山村印刷所

東京市麹町區有樂町一ノ二

發行所 日比谷出版社

(會員番號一二七、〇二五)
電話銀座 〇五九〇番
振替東京三七、八三八番

駒澤大學教授 松崎覺 本著

◎ 揮毫辭典

定價三圓八十錢

B⁶型五〇頁
送料内地二十錢、滿洲六十錢

筆に墨を含ませ白紙に向つて、さて何んと書いたものか、もし間違つた事を書けば、恥を殘す事になり一寸良心が咎めて書けません。昔の人は米庵の「墨場必携」を使用しましたが、米庵は百年前の人で、今の人は今の人の著はしたものを使用するのによいのです。

天胤松崎覺 本著

◎ 一讀必作 漢詩自由

定價二圓五十錢

B⁶型四〇頁
送料内地二十錢、滿洲六十錢

維新の大業を成したる士にて漢詩をよくせざる者一人もなし。非常時局下に於て皇國の精神練成に又漢詩は必要なる文學なり。本書は初學者の爲に著はしたるものにて添作券（二詩五十錢）を添付す。

東京市麴町區有樂町一ノ二

日比谷出版社

電話銀座部〇五九〇番
振替口座東京三七八三八番

212

漢大夫內同馬李遷
天驕龍戲海人問茂
永嘉年失厥

晉文序 雲龍遊飛 如龍躍淵門
難過王泰之 書字勢雄 秘府兼
爲石勒 通遠 駭
歷代寶之 傳以爲訓 藏諸 秘
閣 不許 人
故歷代寶之 途阻 江山 越險
兼爲 石勒 通遠 駭
遂果 兩所 載其 絕滅 物遂
今右 將軍 王
又宋元 聖帝 受命 令 夙外
散 騎 將軍
未利 元 聖帝 受命 令 夙外
散 騎 將軍
爲其 文用 爲 教 授 但 文 勢 不
次 韻 夫 學 者 蓋 生 焉 不 儀
既 功 用
願以 爲 難 至 次 韻 夫 學 者 蓋
生 焉 不 儀 既 功 用
推其 理 焉 以 開 玄 朴 贊 典 之
諸 未 弘 正 代 稍 文
之 始 也 是 以 閉 玄 朴 贊 典 之
諸 未 弘 正 代 稍 文

其 論 天 地 下 文 人 倫 義 及 九
州 派 論 五 岳 日 月
習 約 上 論 天 地 下 文 人 倫 義
及 九 州 派 論 五 岳 日 月
星 辰 之 事 亦 第 一 論 泰 始 始 刻
碑 之 勳 於 斯 辨 釋 然 弄
石 漢 之 本 始 文 傳 通 世 俗 以
爲 法 軌 論 者 難 覓 苦 不 解
義 之 本 始 文 傳 通 世 俗 以 爲
法 軌 論 者 難 覓 苦 不 解
嗣 以 韻 正 之 焉 得 千 字 文 體
義 與 論 者 難 覓 苦 不 解
記 意 以 曉 愚 蒙 若 有 知 者 益
垂 更 爲 潤 色 焉

終

¥1.80